

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26350710

研究課題名(和文) 学校体育における教育学的ケアリングに関する実証的研究

研究課題名(英文) Empirical study of Educational Caring in physical education

研究代表者

梅澤 秋久(UMEZAWA, Akihisa)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：90551185

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：ポストモダン社会の体育の在り方については次のような考察がなされた。「いまここ」に生成されるスポーツ/運動世界に没頭し、意味生成を誘発する授業デザインが必要となる。そのような「生成としての教育」に依拠する学校体育と教育学的ケアリングは関連が高いことが明らかとなった。すべての子どもがスポーツ/運動世界に没頭できるようにするためには、ケア的なモノを活用すべきである。また、教師や仲間による心を砕いたケアが重要となる。学校体育における教育学的ケアリングは、自己と他者とスポーツ/運動世界との三位一体のやわらかな関係構築のプロセスそのものである。

研究成果の概要(英文)：The perspective of the physical education in the postmodern was considered as follows.

It is devoted to the "sport-movements world" generated "Now-Here=In-place", the learning design which induces semantic generation is needed. It became clear that physical education which is based on such "Education as Generation" is related to "Educational Caring". In order to be engrossed passionately interested in "sport/physical-activity world" to all children, it is important to utilize tools with the message of Care. Further, it is important to Caring as "Characterized by Engrossment" by "the others", such as a teacher and classmates. The Educational Caring perspective in physical education is the process of related construction of the Trinity of "self", "the others" and "sport/physical-activity world".

研究分野：体育科教育

キーワード：体育 ケアリング ケア 互惠性 学び合い 専心

1. 研究開始当初の背景

(1) 子どもの「からだ」および学校体育の現状と課題

現代の子どもの「からだ」の様相を概観すると憂うべき状況だと言わざるを得ない。小中学生の不登校児童生徒数は11万人以上(平成24年度文科省速報値)を維持し、内閣府(2010)によれば15~39歳の「ひきこもり」は推定69.6万人に上る。また、核家族化や離婚率の増加による母/父子家庭の増加(厚生労働省2013)に加え、共働き世帯の増加(総務省2013)、生活保護世帯および就学援助受給率の増加や虐待数の増加(厚生労働省2013)など「親密圏としての家庭」(以下、ホーム)のあり方が大きく変わってきている。本来、子どもはホームでケアされつつ育つ存在である(柏木2011)。日本のホームの崩壊率の向上は、アタッチメントやコミュニケーションによる「身体性の構築」が困難な子どもの増加につながっていくと考えられる。現に日/米/韓/中の四カ国の高校生を対象にした調査(前掲)においては、日本の生徒は「親からの評価」に関する質問項目に対し、「低い」と回答する割合が最も高かった。「気分の晴れない鬱的な傾向」は他国に比べて最も高く、5人に1人以上が頻繁に憂鬱を感じていることが明らかになっている。また、「自尊感情」に関する全項目においても最も低く回答する傾向にあった。以上のような「からだ」の様相は、レイン(「引き裂かれた自己」1971)によれば、「身体化されない自己」の状況であり、日本の子どもには多方面からのケアが希求されているといえる。

ところで、Educationの語源の一つは、edu-careであり「ケアする」ことだといわれている。もう一つの語源はeducateであり「引き出す」ことである(佐藤学「教育の方法」2010)。この両者のバランスが求められている中、近年の新自由主義的教育改革の影響は後者への傾斜、すなわち知識や技能といった可視化しやすい能力の育成に教育を傾斜させているといえる。例えば小学校学習指導要領解説体育編においては器械運動における技名の明文化や水泳の数値目標などが該当する。また、体力テストの悉皆化や社会全体の成果主義的アカウンタビリティ意識の増大は運動の効果的特性に依拠した体育学習の再燃に繋がりがかねない。これでは「自身とは離れた、客観的な知識や技能を獲得させ」(佐伯胖「共感 育ちあう保育の中で」2007)たり、運動を手段として体力向上をさせたりすることが体育の主たる学習内容となりかねない。現に東京都や横浜市の一部の学校では体力テストの平均値を上げるために業間体育や授業の前半でサーキットトレーニングを継続的に実施している。そのような獲得型の学習では学習意欲の低下に繋がることが懸念される(佐藤学「『学び』から逃走する子どもたち」2000、藤田「教育改革のゆくえ」2006)。また、学習意欲の低下は、近年の「運

動する子としない子の二極化傾向」に拍車をかけるという本末転倒の結果に繋がりがかねない。以上のように、学校体育において客観的な数値を上げたり技を獲得させたりする行動主義的学習が再燃し始めていることも課題だといえる。

(2) 教育学における「からだ」とケアリング

(1)で概観した通り、現代の子どもの「からだ」の状況は、思想としてのケア(メイヤロフ「ケアの本質」1987)を必要としていると言わざるを得ない。そのことはケアを行為として実践するケアリングが希求されていると換言できる。ローチ(「ケアする存在としての人間」1996)によれば、「人間の発達」は、ケアを受けるだけでなく、ケアをなしうることにもまた依存している」という。すなわち、他者との双方向コミュニケーションによる間身体的なケアリング関係の構築が発達において重要だといえる。また、ノディングズ(「学校におけるケアの挑戦」2007)は、「ケアする人」と「ケアされる人」の関係性を教育的に再構築している。すなわち、「教える者」と「学ぶ者」のケアリング関係に着目し、そこでの「感覚の共有」を重視している。さらに、ノディングズ(「ケアリング倫理と道徳の教育」1997)は「共感(sympathy)」や「共に感じること(feeling with)」が、学びの中身を「取りつかれたかのように主体的に関与する」「関係の中に巻き込まれる」「受容的な喜び」といった状態に変容させることの必要性を論じている。佐伯(前掲)も「人間発達を『共感性』を軸として捉え直し、教育の中心とすべきである」と強調し、従来の「自分とは離れた、どこか権威あるところで生み出され、権威ある人から授けられることで、たたきこまれる」という行動主義的な知識・技能観からの脱却を図る必要性を主張している。

前掲の日米韓中の意識調査において、日本の生徒は、「先生は優秀さの評価をしてくれる」「先生は相談がしやすい」といった質問項目に最も低く回答する傾向にあり、4カ国の中で教師との関係が相対的に最も希薄であることが明らかとなっている。多方面からのケアが必要な日本の子どもに対して「教師-学習者」関係におけるケアリングを重視し教育活動にあたることが重視されてきているといえる。

「感覚の共有」としての学びは、正統的周辺参加による「わざ」の伝承場面においては古くから実践されている(レイブ・ウエンガー「状況に埋め込まれた学習」1993)。その状況論的学習は構成主義的学習の一様式であり、研究代表者は体育学習を行動主義から構成主義的学習へのパラダイムチェンジを推奨している。と同時に、研究分担者らと共に「感覚の共有」に繋がる「『感じ』と『気づき』」を大切にしたい体育の授業づくりについて研究している。また、運動の共感的特性

を重視した授業づくりについても論究している。しかしながら、運動のみならず、「からだ」をも目的とすべき体育科において、ケアリングの教育学的意義に関する研究は未だなされていない。さらに、ケアリングを重視した体育実践研究は行われていないのが現状であり、研究課題として意義があるといえる。

2. 研究の目的

(1)本研究では、まず体育における教育学的ケアリングの意義を先行研究から理論的に明らかにする。

(2)体育授業場面におけるケアリングの意味生成をアクション・リサーチによって明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1)理論研究においては、文献研究と先行研究者への聞き取り調査を実施する。

(2)アクション・リサーチにおいては、実践研究協力者との協働による実践研究を実施し、その学びの経緯で生じたケアリングの意味を明らかにしていく。

4. 研究成果

(1) 運動部活動における勝利追求主義とケア思想に関する研究

運動部活動において体罰／暴力的指導は許されない。それでもなお体罰が繰り返されるのは、体罰やそれを可能とする考えを滲み込ませた教師の身体性と運動部活動の目的を勝利と履き違えることから始まる。スポーツの名門校／部においては「狡猾でひそかにやさしげな教育的駆け引きの中」で選手や保護者を支配する関係性が構築されていく。もとより、世代的にみて保護者にも体罰容認の身体性が滲み込んでいる場合が少なくないと考えられるが、狡猾な駆け引きの一部である体罰の報酬として勝利を受け取ることで、名門校／部への帰属意識が強固なものとなる。その結果として「社会的な体罰の容認」がなされていく。勝利という目的だけに向かって手段を選ばず盲信する「誤った勝利至上主義」を廃すことが肝要である。そのためには、勝敗には偶然や運の影響を受けることがあるという理解、勝利を追求しつつ敗北を恐れずそれを受け入れる態度を有する「勝利追求主義」への思想の転換が希求される。

勝利を追求することは超越を志向する。それは敵を相対的に低めることで自身が優位に立つことではない。自チームの仲間と同様、対戦相手と同じスポーツで互いを高め合う存在としてケアする。「専心」的なケアを「受容」した相手は、ケアに対する「応答」をし、スポーツ場面におけるケアリング関係が構築される。それは同時にスポーツ自体の面白さが質的に高まることに繋がり「学習者-対象世界」におけるケアリング関係の再構築を促す。すなわち、運動／スポーツを目的とす

る生涯学習社会における学校体育／運動部活動の理論的枠組みと一致する。

高橋は「生徒 教師のあこがれの感受知的世界への参入 という欲望の深層構造」(高橋勝 2013「教師-生徒 関係をどうとらえるか」教育学術新聞、第2529号)というトライアングルを明らかにしている。「生徒は、教師の あこがれ に あこがれ抜いて、ふと気がつけば、知(スポーツ)の世界のど真ん中にいる自分を発見するのである(括弧内は筆者)」。教師の欲望の対象は、地位や名誉、勝利ではない。教師／指導者の役割は、その運動／スポーツに内在する中心的な面白さや文化、選手である生徒はもちろん、かわる全ての人やものをケアすることである。そのような超越志向とケア思想が融合した教師／指導者の身体性は学習者／選手に滲み込んでいくのである。

(2) 学校体育における教育学的ケアリングの地平

本論文では、まずポストモダン社会における「生成としての教育」の重要性をケアリングの地平から再検討した。

教育学的ケアリングは、産業社会に必要な有能な人材を育成する「大きな物語」に依拠した学校教育を否定し、「生成としての教育」を実践する学校を構想する思想だといえる。格差が拡大する社会における教育は、習熟度による懸隔を推奨することで、格差が拡大する可能性が否定できない。さらに、優劣で価値判断をする人間形成に資する可能性すらある。すなわち、多様な他者と「差異中の同一性」によるかわりあい希求されているのであり、その関係こそポストモダン社会の教育学的ケアリング像の一つであることが明らかとなった。

マーティンは「スクールホーム」すなわち、「居場所としての学校」を推奨している(マーティン(2007)『スクールホーム ケアする学校』生田久美子訳、東京大学出版会)。学校は、行き先でもあるが、同時に帰る場所でもある。安全や安心がきちんと保障され、子どもの成長や自己実現がケアされる場所、それが、ケアリングが目指す学校のイメージだと述べている。家庭における貧困や格差、そしてそれによる学力等の格差が顕著になってきている。どの家庭に生まれようとも、全ての子どもに、学ぶ可能性を与え、育つ可能性を与え、自己実現の可能性を与えなければならぬ。それが唯一保障されるのが、学校という場所であり、その根源的な役割である。

「発達としての教育」を超越し、「生成としての教育」に依拠したケア／ケアリングのもたらす姿は単にユートピアではない。「発達としての教育」への回帰的改革をシニシズム的に受け容れてはならないのである。崩壊したはずの「物語」に強制的に社会的な意味を付与し、態度を評価することで強制的に「発達を要求」することでは、学ぶ意味は生

成されないからである。

さらに、本研究では、ポストモダン社会の学校体育の視点から教育学的ケアリングの地平を検討してきた。その結果、次のようなパースペクティブがみえてきた。

すなわち、「いま-ここ」に生成されるスポーツ/運動世界に没頭し、意味が生成される学習空間が、ポストモダン社会の学校体育の様相といえる。そのような「生成としての教育」において、多様な他者とのコミュニケーションが図られた様相が学校体育における教育学的ケアリング像である。

すべての子どもを対象とする体育科においては、「発達としての教育」のみを首謀することで、ケアを希求する子どもたちは淘汰されやすい。活動的な教科である体育科は、快活な学習者にとっては無条件に楽しい教科である。しかし、多様なケアが必要な子どもたちを含めすべての子どもがスポーツ/運動世界に没頭できるようにするためには、モノ自体にケアのメッセージを込めることが肝要である。また、他者である教師やクラスメイトによる心を砕いた専心的なケアを実践することも重要となる。体育科における教育学的ケアリングとは、自己と他者とスポーツ/運動世界との三位一体のやわらかな関係構築のプロセスだといえる。

学校体育の一部を形成する運動部活動においては「スポーツ運動」による意味生成が重要となる。誤った勝利至上主義に依拠する、ケアとは真逆の暴力的指導は許されない。「いま-ここ」に生成される自己とスポーツ運動との溶解が「勝とうとする意志のもとでおのれの能力が十分に発揮されたとき、幸運にももたらされるスポーツ実践者の幸福体験」となり、忘れようにも忘れられない自己を生成する一部となるのである。より速く、より強く、勝利を追求するプロセスにおいて、またダンスのような身体表現の美的限界を追求するプロセスは、スポーツ/運動世界をケアし、それにケアされる瞬間である。自己とスポーツ運動ないし身体運動とのケアリングが教育的に実践されるのが運動部活動である。

また、すべての学校体育場面において共通することには、他者の「憧れに憧れること」である。指導者や仲間が没頭しているスポーツ/運動の世界との溶解体験に心底憧れることは、他者（指導者や仲間）を自己の一部と捉えることと等しい。それは自己が、自己の一部となった他者によってスポーツ/運動世界に誘われる瞬間でもある。新たにスポーツ/運動世界との意味生成が生まれた人（自己）に対して、憧れられた人（他者）が心を砕いてケアを為すことで、自己、他者、スポーツ/運動世界との三位一体のケアリングが完成する。

スポーツ/運動自体をケアし、他者を専心的にケアし、ケアされるケアリング関係を構築し続け、結果的によりよい自己生成をする

ことが、学校体育において求められる教育学的ケアリングである。

(3) 体育における「学び合い」

教え合いから協働へ

協働とは「同じ目的のために、二人以上が協力して働くこと」(日本語大辞典)である。21世紀の学び合いは、「同じ目的のために」「対等なパートナーシップ」に基づくという事項がポイントになる。すなわち、できる子ができない子に教えるという一方通行の「教え合い」との決別を示唆している。子どもたちが同じ目的のために学び合うためのポイントは、教師による協働達成が不可避なプロジェクトやテーマ設定である。

競争と学び合い

体育は、集団で行うスポーツを教材とする場合が多いため、学び合いは当たり前と思われる。しかし、スポーツの競争要素だけが前面に押し出されると学び合いにくい。「『競争に勝つ』ことのたいせつさだけ教え込んでいたら、子どもはいずれ、『自分ひとりが相対的に有能で、あとは自分よりも無能である状態』を理想とする」(内田樹 2008 街場の教育論、ミシマ社)。体育教師の多くは、スポーツに内在する競争の中で自己を創り上げてきただろう。ゆえに競争の重要性が心身に沁み渡っていると考えられる。

時折、「勝つための方法/作戦を考えよう」といったテーマを掲げた体育授業に出くわす。ほとんどの実践が、勝ったチームは優越感の共有をもとに仲間関係が強固になり、負けたチームは劣等感に苛まれ険悪なムードで終わる。子どもたちにも、教師が抱いている「競争は勝つためにある」という思想が沁み込んでいるためだ。子どもたちは感覚で気づいている「勝つための(一番効率的な)方法は、できない奴がいなければよい」と。できない子からすれば「自分さえいなければよい」という思考につながりかねない。

スポーツに付随する競争は、学校教育においては目的にはなり得ない。教育における競争は、互いが切磋琢磨し、共に成長し合うという超越的な学び合いのための手段である。

運動世界に誘うモノ

良質な体育の学び合いを創出するためには、全ての子どもを運動世界に誘うためのユニバーサルデザインのモノ(物)を導入すべきである。しかし、あまりに優/易しすぎる道具になると、運動が得意な子にとっては満足できない。教師はその頃合いを見とり、学級内の全ての子どもにとって新たな運動世界が拓かれる道具やルールを設定する必要がある。

しかし、時代がどんなに変わっても、最も子どもたちを学びの世界に誘うモノ(者)は教師である。丁寧な子どもの見とりと学級/学年経営。「体育上手は、経営上手」である。そのような良質な教師の憧れには子どもたちも憧れる。大好きな先生が憧れている「私

達のスポーツの協働的創造=学び合い体育」に子どもたちが憧れ、いつの間にか「学び合い体育」の世界に没入し、そのスポーツや運動のもつ面白さを味わい、新たなスポーツ世界を拓き合っていくのである。

(4) 運動格差を解消するための学校体育におけるケアリングの実証的研究

スポーツ庁設置に伴う体育の短絡的なスポーツ化は、勝利や競技能力の向上に傾斜しかねない。スポーツには紛れもなく競争(アゴン)の面白さが内在する(ロジェ・カイヨワ(1990)『遊びと人間』多田道太郎ほか訳、講談社学術文庫)。しかし、過度な競争意識は、運動格差の低水準の子どもたちを運動から逃避させる可能性がある。21世紀に求められる良質な体育(Quality Physical Education)はすべての学習者を対象にしなければならない。本研究では、運動格差を包括した、すべての子どもを対象とした学校体育におけるケアリングの実践的ヴィジョンを明らかにすることを目的とした。以下、本研究で表出したケアリングの様相から実践上の展望を以下の通り明らかにした。

運動格差の低水準児童へのケアと学習デザイン

すべての自己(=全児童)とスポーツ/運動とのケアリング関係の構築のためには、運動格差の中で低い水準層の児童をスポーツ/運動の世界に参入させる学習デザインが必要不可欠である。

本研究では、モノの工夫として、投捕しやすい柔らかなボールを用いた。ルール工夫では、ゲームの少人数化を図り、参加の機会を多く確保し、ドリブルを排除することで協働達成の必然を与えた。カリキュラムは、共通の到達目標を設定する「プログラム型」ではなく、毎時間オープンエンドなテーマを教師から提示し、学習者が追求する「プロジェクト型」を採用した。さらに、競争はパスによる局面の突破に着目をさせ、「突破できる/できない」の間の面白さを意識させた。結果としての勝敗に固執させず、勝ち負けの間を楽しめるように得点板を使用せずにゲームを行うこととした。なお、ケアリングの視点からの学習デザインとして最も重視したのは、心の安全・安心の確保である。特に他者からの叱責や文句、嘲笑は、格差の低水準の児童を運動から逃避させかねない。ゆえに、マナーとして全児童に周知した。

これらの学習デザインが、運動格差の低水準児童であるA児をスポーツ/運動世界に誘った。運動格差の低水準児童に対しては、ケア的なモノ、ルール、テーマに加え、安心を与え合う関係のデザインが重要になると考えられる。

ケアする者とされる者の関係

本研究では、運動格差の高水準児童B児の低水準児童A児への関わり方の変容が、ケアリング関係の構築に影響を与えたと考えら

れる。ゲームに慣れてきた単元3時間目の段階では、B児のパスは半数以上が自己中心的で「非効果的」であった。一般的な競技スポーツにおける発達では、パスは「より速く、より遠くに」が求められる。しかし、5時間目のB児は「より易しく、より丁寧に」チームメイトにボールを送球し、効果的なパスを7割まで向上させていた。これは、B児が「自己の一部となった他者」にケアのこもったパスを送れるように変容したためだと考えられる。

ケアリング関係はケアする者がケアされる者に専心的に関わり、それをケアされる者が受容・承認し、応答することで、新たな専心的なケアが誘発される(ノディングズ 2007『学校におけるケアの挑戦』佐藤学訳、ゆみる出版)。しかし、本研究におけるケアリング関係は、運動格差の低水準、すなわちケアをされる者が発する「空いているよ」「パスをちょうだい」といったメッセージを、ケアする者である運動格差の高水準の児童が受容・承認し、応答したところから関係構築がなされている点が特徴的であろう。

競技スポーツにおける勝利だけが目的であるならば、技能が特に劣る他者に対しては「パスをしない」という選択が最善のプレーとなる。しかし学校教育の一部である体育は、すべての学習者の成長を保障しなければならないため、教師には、運動格差の高水準の児童(ケアする者)が、低水準の児童(ケアされる者)に目を向けられるようなテーマ設定や関係のデザインが求められるであろう。

自己・他者・スポーツ/運動の三位一体のケアリング関係の構築

ケア的な学習デザインにより運動世界に参入し、加えて他者とのケアリング関係が構築できている段階ですでに、自己・他者・スポーツ/運動の三位一体のケアリング関係は構築できていると考えられる。なぜならば、自己(ケアされる者)と他者(ケアする者)の関係は、学習対象であるスポーツ/運動を媒介に構築されていくからである。この原初的な三位一体のケアリング関係をより強固なものに変容させていくためには、互恵性が不可欠となる。本研究においては、A児へのケア的なパスが認められるようになった単元5時間目は、3時間目と比較してチーム全体の「意思決定」「サポート」「カバー」がより適切になり、「技能発揮」はより効果的になっている。すなわち、「哀れみ」で「パスを出してあげる」のではなく、運動の特性である突破のためにパスを出していたといえる。

差異のある他者同士が互恵的にスポーツ/運動と関わり合う、すなわち自己と他者とスポーツ/運動との三位一体のケアリング関係の構築のために必要なのは、失敗が受容されるルール設定や関係デザインに基づいたお互いの成長だと考えられる。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計20件)

- 梅澤秋久(2016)競争が教育学的意味を持つ条件、体育科教育、査読なし、第64巻2号p.36-39. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)21世紀型の体育の創出に向けて-すべての子どもが運動世界を拓き合うために-、体育科教育、査読なし、第63巻12号p.58-60. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)中学校第1学年「器械運動」身体的リテラシーと運動感覚の学び合い、体育科教育、査読なし、第63巻11号p.54-56. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)「バレーボール」中学校保健体育科の授業づくりと学び合い、体育科教育、査読なし、第63巻10号p.52-54. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)「この子」とチーム/クラスのケアリング(5年生のベースボール型)、体育科教育、査読なし、第63巻9号p.54-56. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)身体的共振を誘発する「表現・リズム遊び」(1年生)、体育科教育、査読なし、第63巻8号p.54-56. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)身体的共振を誘発する「表現・リズム遊び」(1年生)、体育科教育、査読なし、第63巻8号p.54-56. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)低学年「ゲーム」での互恵的学び合いの実践例、体育科教育、査読なし、第63巻7号p.54-56. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)第4学年の「かけっこ・リレー」の実践、体育科教育、査読なし、第63巻6号p.66-68. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)教師の「学び合い」-子どもの学びを創るアクション・リサーチの事例-、体育科教育、査読なし、第63巻5号p.54-56. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)教師の「学び合い」-スポーツによる学校変革と正統的周辺参加の一事例-、体育科教育、査読なし、第63巻4号p.68-70. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)「自己・他者・対象との対話的实践」としての「学び合い」、体育科教育、査読なし、第63巻3号p.74-76. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)「学び合い」を誘発する「道具」-アフォーダンスとユニバーサルデザイン-、体育科教育、査読なし、第63巻2号p.58-60. ISSN 0913-3933
- 梅澤秋久(2015)「いま-ここ」の個の学びを「学び合い」につなげる-憧れに憧れる関係性-、体育科教育、査読なし、第63巻1号p.54-56. ISSN 0913-3933

梅澤秋久(2014)知識基盤社会における「学び」と「教え」-運動の特性を味わわせるための教育方法-、体育科教育、査読なし、第62巻12号p.68-70. ISSN 0913-3933

梅澤秋久(2014)知識基盤社会における「学び」と「教え」-学力論の転換-、体育科教育、査読なし、第62巻11号p.42-44. ISSN 0913-3933

梅澤秋久(2014)なぜいま「学び合い」なのか、体育科教育、査読なし、第62巻10号p.42-44. ISSN 0913-3933

梅澤秋久、矢邊洋和(2016)運動格差を解消するための学校体育におけるケアリングの実証的研究、横浜国立大学教育学会研究論集、査読有り、第3号p.1-11. ISSN 2188-3750

梅澤秋久(2015)学校体育における教育的ケアリングの地平、(公社)日本女子体育連盟学術研究、査読有り、第31号p.1-17. ISSN 1882-0980

梅澤秋久(2014)運動部活動における勝利追求主義とケア思想、横浜国立大学教育学会研究論集、査読有り、第1号p.71-81. ISSN 2188-3750

[図書](計2件)

鈴木直樹、梅澤秋久他(2016)学び手の視点から創る中学校・高等学校の保健体育授業 体育編、大学教育出版、195ページ ISBN 978-4-86429-396-9

梅澤秋久(2016)体育における「学び合い」の理論と実践、大修館書店、176ページ ISBN 978-4-469-26800-3

6. 研究組織

(1)研究代表者

梅澤秋久(UMEZAWA Akihisa)
横浜国立大学・教育人間科学部・准教授
研究者番号：90551185

(2)研究分担者

鈴木直樹(SUZUKI Naoki)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：60375590

村瀬浩二(MURASE Koji)
和歌山大学・教育学部・准教授
研究者番号：90586041

(3)研究協力者

矢邊洋和(YANABE Hirokazu)
横浜国立大学・教育人間科学部附属鎌倉小学校・教諭

濱地優(HAMACHI Yu)
横浜国立大学・教育人間科学部附属横浜小学校・教諭